

◇私の戦後 76 年！悲惨な戦争の記憶

大槻伸次

戦後 76 年、未だに第二次世界大戦末期（昭和 19 年末から終戦まで）の戦乱が脳裏をよぎる。中でも、昭和 20 年 2 月 10 日の米戦略空軍の B29 による太田大空襲（特に中島飛行機太田工場）の場面は忘れられない。こんな話しを友達にしたら、親の話しを聞いているうちに、いつしか自分で体験したような錯覚を起こしたんじゃないかと云われたが、すごく腹立たしかった。一般的に、幼いころの記憶がないのは幼児痴呆というそうで、個人差があり 2 歳頃より記憶がある子供がいるといわれている。

私が 3 歳 7 か月の頃、父に連れられ当時の太田町内二丁目付近に存在した家具店の付近に、現在でいうスーパーみたいな所があって食品を買いに行った記憶がある。

また、この頃昼夜を問わず逃げ回る生活について、大人達の毎日の立ち振る舞いを機敏に感じ取って、恐ろしいことが起こっているという事は充分認識していた。しかし、時間的な繋がり承知してなくて、すべて点の記憶として残っている。

昭和 20 年初頭から、戦局は米軍の圧倒的な支配力により日本は満足な応戦さえできない程に兵器も兵士も消耗していたようだ。そして、昭和 20 年 2 月 10 日からの中島飛行機太田工場への米空軍の空襲が始まってからというもの、夜も安心して寝られない日々だった。そこで、兄と私は居間の 8 帖間で西向きに、父母と生まれたばかりの妹達は奥座敷の 8 帖間で東向きに布団を敷き、お互い万が一のときに備えて枕が近いようにして床に就いた。（生家は典型的な農家作りで、部屋は田の字型の配置）。

そして枕元には、上着や履物、防空頭巾など揃え、空襲警報のサイレンが鳴ったらすぐ逃げられるように衣服は着たままだった。ところが、ある真冬の深夜のこと、北風にかき消されるように物悲しい空襲警報のサイレンが、ポーポーとしきりに鳴った。

しかし、父母達は昼の疲れだろうか寝入ってしまったようで全く反応がなかった。そこで、兄と 2 人で父に知らせるため、父ちゃん！父ちゃん！空襲警報のポーがなっているよといって大声をあげた。するとようやく父は反応し、オ！、ソーカ！と起き上がり大急ぎで逃げるよう指示され、漆黒の闇の中を防空壕に駆け込むということがあった。また、ある日の昼食中のこと、空襲警報のサイレンが鳴ったので家族全員反射的にご飯の茶碗、汁わんなどをちゃぶ台の下に隠し庭先の防空壕に走った。

特に忘れられないのは、昭和 20 年 2 月 10 日午後のこと、当時、我家には情報源のラジオが無かったから母は妹（昭和 19 年生）をおんぶして、西隣宅にお邪魔しラジオニュースを聞かせてもらっていたそうだ。すると臨時ニュースが発令され、米空軍の爆撃機である B29 が北関東、北関東方面に向かった模様だと報じたというが、数分も経たないうちに敵編隊は既に太田上空に差し掛かっていたという。

そこで、母は大急ぎで自宅に戻り、風邪のため居間に寝かされていた私を連れ出すため、夢中で母屋に駆け込んだという。（隣家との境界はあつてないようなものだったので、行き来は簡単にできた。）居間の、瀬戸焼の火鉢の所に寝かされていた私を（3 歳 8 か月）無我夢中で抱きかかえ、表の縁側から庭へ飛び降りようとしたその瞬間、母は尻にものすごい鈍痛を感じたそうだ。すると間をおかずして「もんぺ」のすそから

温かいもの（大きな尻の肉片）が、するすると落ちてきたという。即ち、米軍の投下した焼夷弾が生家の東隣の畑に落下し炸裂、その鉄片が母の尻を直撃し削ぎ取ったのである。母は夢中でその肉片を拾って割烹着のポケットに入れ、助けを求める為に西隣家の防空壕に辿り着こうと必死だったのである。その日、母は白い割烹着を着ていた。母は、尻肉を削ぎ取られたが、その直後は鈍痛を感じただけで傷みはあまり感じなかったそうだ。幸いだったのは、背中におんぶしていた1歳にも満たない妹の足は何事もなかったことである。妹の足が爆弾の破片を免れたのは、母が縁側から飛び降りるとき母の体がくの字になったため、子供の足が上に持ち上がる状態になって被災を免れたのだろうと云っていた。

母は、妹をおんぶし3歳7か月の私を抱きかかえ、出血と鈍痛をこらえ、助けを求めて隣家の防空壕に辿り着いた。ところが、家族との連絡役の長男がいないと叫んでいた。西隣の家は防空壕とは名ばかりで、三角形をした小さな藁ぶき屋根の小屋（地面の上にテントを張ったような）で、門を入った左端に設置されていた。また、母に抱かれて避難の途中、畑に落下した焼夷弾が炸裂した際、上空に巻き上げられた大量の土砂が屋敷に降り注ぎ、納屋のトタン屋根はザーザーとすごい音をたてていた。

戦後、爆弾の炸裂で開いた大きな穴にコンクリート管が入れられ、しばらく井戸になっていたが、平成17年の宅地造成によって埋め立てられ撤去されたようで跡形もなくなっていた。私自身の記憶にあるのはこの時の出来事で、時間的な繋がりにははっきりしないが、数少ない戦争の生々しい記憶の一齣である。

母が重傷を負ってからその後どういう経過になったかは定かではなかったが、後で父から聞いたところによると、我が家の裏に駐屯していた陸軍高射砲部隊によって中島飛行機の疎開病院へ荷車で搬送されたという。連れて行かれた中島飛行機の疎開病院（現在の太田記念病院）は空爆で破壊されてしまったため、直近の天神山古墳に疎開していたようで、間をおかず治療を受けられたのは幸いだったと云っていた。

母は我が家の荷車で運ばれていったそうだが、道路は爆撃による損傷と死人があちこち横たわっていたので荷車が引けない程で、軍隊が荷車を担いで連れて行ってくれたと父は言っていた。ようやく辿り着いた中島飛行機の疎開病院で緊急縫合手術を施されたが、命に別状は無いといわれたそうだが、後遺症として「ちんば」になるかもしれないとの診断だったそうである。

私は、家が爆撃を受け家の中がすっからかんになって北風（2月10日極寒）が吹き抜けるほど破壊（生家は数年前分家した当時、医者様の家のようにと云われる位にガラスが多用されていたので、見学者が絶えなかったという。）されたので本家に預けられることになった。そしてその日、祖父におんぶされ本家に向かった。ところがおんぶされた祖父の背中から地区を振り返るとあちこちに火の手があがっていた。自分自身はどういうことなのかよくわからず、怖いという思いはあまり感じなかった。兄も一緒だったが、兄は本家に預けられるのをすごく嫌がりすぐに帰ってしまったそうだ。後でその訳を聞いたところ、以前本家に預けられた折、兄が用足しをした後の作法を本家のおばさんに咎められ、男の子はこう拭くのだ、女の子はこう拭くのだと事細か

に云われたのが厭だったということを知った。昔の人は一般的に、躰は厳しかったのであるが、本家のおばさんは看護婦だったので余計そうだったのであろう。

私自身はしばらく本家に預けられたままだったが、生活の中でわずかに記憶にあるのは、昼食時に陽の当たる縁側で食事をさせてもらっていたようで、「おばさん」がいつもお勝手から鍋や茶碗などを運んでくる姿をしっかりと覚えている。

母は入院したままの数ヵ月後の 8 月 15 日終戦となる。そして中島飛行機の疎開病院は本家の伯父が学校長をしていた N 小学校に移転した。

戦後、父に連れられ N 小学校へ移転した病院へ母の見舞に行ったら、母は金属製のベッドに横たわっていた。このとき、梅干入りの大きなお握りをもらって食べたが、そのお握りが旨かったことは忘れられない。

母が罹災したことの証明として、太田町役場では「罹災証明書」を発行してくれたそうだ。そこで、母はこの「罹災証明書」を後生大事に保管していたというが、なんの補償も無かったとぼやいていた。母はあまりにも腹だたしいので、昭和 30 年代に市役所の福祉の窓口へ持っていき見舞金ぐらい出せと直談判にいったというが、市の福祉担当からそれは無理とやんわりと断られたと聞いた。

断られたのは仕方がないが、本気で見舞が欲しいわけでは無く国家による戦争によって受けた庶民の苦難を解って欲しいという抗議の意味もあったようだ。

父によると、天神山古墳に疎開していた中島飛行機の仮設病院には明日をも知れない重症の患者が多数収容されていたそうです。そこで、母の怪我ぐらいは医者も驚きはしなかったというからその惨状が窺い知れる。

仮設病院内は騒然とし、今にも息絶えそうな人たちが多数収容されていたそうだ。生き絶え絶えの重症患者は、父が見えると水をくれ水をくれと父の服を引っ張り懇願されたそうである。父は、水をくれと余りにも懇願されるので、体の損傷具合を見て医師に相談すると、水をやってくれというので、コップで水をやると旨そうに飲んで静かに息を引き取ったという。この人が何処の誰であるか知る由もなかったという。

(太田は中島飛行機という軍需工場があったので日本中から人が集まっていた) その惨状はアメリカ映画の「風と共に去りぬ」の一場面からも想像できるだろう。

母の入院先に、弁当を届けてくれたのは本家の長男だったそうで、ある日のこと弁当を食べた後トイレをもよしたがるが、トイレの世話などしてくれる人は誰一人いないので、思案した揚げ句今食べたばかりの空の弁当箱を尿瓶代わりに用を足してしまったそうだ。次の日、本家の長男がその空の弁当箱を取りに来たが、洗いもせず手渡したという。

父によると、この頃たびたび市内に空襲があり、中島飛行機太田工場や太田駅、東武線の踏み切など重要施設にもものすごい爆撃があつたという。更に生家西方の、中島飛行機の社員寮は空爆の直撃で全員死亡したらしく、死体や肉片が近く木にぶら下がっていたそうだ。また、母が入院していた天神山の仮設病院に行くまでの道路には死体がまだそのままになっていて荷車は担つがたいと辿り着けないほどだったと云う。母が仮設病院へ入院した後、連絡役の兄(5 歳)がこの隣家の防空壕に帰ってきたが、

役立たずとすごく怒られたそうだ。母が隣家の防空壕に助けを求めに行ったのは父が留守だったため兄を連絡役としていたのだろう。

隣家の防空壕は地上に作った藁葺き三角屋根のテントのような簡単なものだったが、生家の防空壕は地面を掘って、その上に厚床の畳が何枚も重ねたものだったそうである。そこで我が家の、防空壕の構造のことが、当時の朝日新聞に取り上げられ、「畳の厚床は爆弾の破片を食い止めるのに効果あり」と報じられたと父が自慢げに話していた。大きくなってから聞いたことだが、この空襲のとき自分が寝かされていたところの瀬戸焼の火鉢は焼夷弾の破片が直撃し、真っ二つに割れていたというから、母が来なかったらあの世行きだったかもしれない。思い出すとぞっとする。

この頃（昭和 20 年の年初）、徴兵検査で甲種合格にならなかった父にも召集令状の赤紙がきて帝国海軍横須賀海兵団に入隊することになった。そこで、母は大怪我を負った為一歳の妹は母の実家に預けられることになったが、その時子守を引き受けてくれたのは幼い従姉妹だったそうだ。しかし従姉妹は、父親に言いつけられたため子守を引き受けたものの、戦火の中の慣れない幼子の子守りに心細く涙を流しながらの毎日だったと聞いた。あるときあまりの子守の大変さを父親に訴えたら、すごく怒られたという。

父の入隊の招集場所は高崎だったそうで、招集日の前日出発し高崎市内に宿をとることになったが、当時旅館だって簡単に泊まらなかったという。そこで、父は近所の I さんの親戚の旅館に泊まれるよう紹介状を書いてもらってコメを持参していったそうである。そして父は海軍の横須賀海兵団に入隊したが、身分は帝国海軍二等水兵だったそうで、鍔の無い帽子とセーラー服を着用したという。ところが、宿舎から横須賀軍港を眺めて驚いたのは軍艦など船らしき物は一隻も停泊せず、父のような一兵卒には小銃すら渡らなかった状態だったという。

父が、横須賀海兵団に入隊し、配属先を決める段取りになったとき、突然サーベルを下げた将校が群馬県の出身のものはいるかー？、群馬県の出身のものはいるかー？と大きな声で何度も叫んだという。父は何事かと緊張しながらおそろおそろ手を上げたら将校は、群馬の何処だ！と云ったので太田だと答えたそうだ。すると将校は俺は O 郡の S 村出身だが、太田の U 地区に親戚があると即座に返答したという。

そこで将校から詳しく話を聞いたところ、その親戚は父の生家である本家だと直ぐに解ったそうだ。というのは将校の祖父に当たる人が、本家から O 郡の S 村に婿に行っていると、父から聞いたことがあると話すと、うんそうかと絶句したという。父はまったくの奇遇で、こんなことが本当にあるのかと思ったそうだ。

父は、当座は戦闘地域や海外に派遣されることはなく基地内で上級将校の雑用係をしてくれと云われたそうで、戦闘地域に送られることはなかった。ちょうどその頃、我が家では昭和 20 年 2 月 10 日の空襲で連れ合いが大怪我をし、家が罹災した旨告げられたところ、将校が事実かどうか軍から町役場へ問い合わせをする、申請が事実だったら即刻休暇を出すと云ってくれたそうである。父の一時帰郷に同時入隊の仲間は羨めしそうだったそうで、次の復隊は昭和 20 年 9 月 1 日だと云い渡され横須賀海兵団を

後にしたそうだ。帰宅を許可された父は、ずたずたになった鉄道をやっとの思いで乗り継いで横須賀から秋葉原駅まで辿り着いたという。ところが、秋葉原に到達したのはいいが、駅舎とその周辺はすごい爆撃を受けたらしく悲惨な状態だったと云っていた。思いもよらぬ俸の帰宅を一番喜んだのは父親（私の祖父・祖母は亡くなっていた。）だったという。父親（私の祖父）は、すぐさま母の実家に出向き俸が帰ったことを報告すると母の兄は小躍りして喜んでくれたという。

米軍はサイパン島を占領すると日本本土の空爆を開始するが、東京や北関東の軍事施設が狙われ昭和 20 年 2 月 10 日の北関東（太田）の空爆は悲惨を極めたようだ。空爆は第一波、第二波と続き、空爆の第一波は中島飛行機太田工場を直撃して帰る。

そして第 2 編隊がやってくるが、季節が冬のため第 1 編隊が破壊した工場火災の煙が、西風に流され生家の上空あたりやって来た頃、空爆の第 2 編隊がくるので、生家の地区を中島飛行機の工場と間違えらしく誤爆していくが多かったそうだ。（2 月 10 日午後 3 時 5 分、アメリカ戦略空軍の B29、84 機が太田上空に達し、748 発の 500 ポンド（250 キロ）爆弾と 198 発の 500 ポンド（250 キロ）焼夷弾が飛行機から中島飛行機工場などめがけて投下されたという。）この為、中島飛行機太田工場の東方の各地区はひどい爆撃（誤爆もあった。命中率 16% だったという。）に晒されたのである。空爆は、サイパン島の米軍基地から飛来する 4 発の長距離爆撃機ボーイング B29 によるもので、日本軍の迎撃は主に高射砲で応戦、花火を上げるように火を吹いたという。ところが、日本の高射砲は 7,000m 位しか達せず 8,000m 以上を飛行する B29 は容易には打ち落とせなかったそうである。

空爆が始まると、我が家の裏手の高射砲が火を噴くとその衝撃は凄まじいもので、我が家が 30cm は飛び上がるのではないかと思わせるほどの衝撃が感じられた。たまたま、どういふことか B29 が我が家の東方の田んぼに一機不時着したそうだ。

太田市史によると高射砲で撃墜したとあるが、そのときもう一機に接触し 2 機墜落したという。搭乗員は O 郡の寺院に埋葬されたそうで、平成 25 年初頭に記念碑が建設され日米で供養がおこなわれたと聞いた。墜落したときの様子を見た人の話しによると乗員は 8,000m 以上の上空を飛んでいてもシャツ 1 枚とストッキング姿だったという。当時のアメリカ軍の装備がいかに優れていたことか改めて驚かされたそうだ。

残念ながら日本の迎撃部隊は、迎撃はおろか満足に飛ぶことさえかなわない程に打撃を受け、制空権は完全にアメリカ軍の手中にあったようだ。

爆撃やバリバリという機銃掃射がおさまった後、父が防空壕の入り口を空け、促されて上空を見上げると、冬の西日に照らされた B29 の豆粒のような機体が銀色にきらきらと光っているのが良く見えた。現在でも高空に小さな機影を見ると昨日のここのように思い出される。

生家の裏手の北方（現在のイオン）から北東方向の旧中島飛行機の寮周辺が、旧中島飛行機太田工場を防衛するための高射砲陣地群だったのである。終戦後も暫くのあいだコンクリート製の高射砲砲台が数十基残っていて子供の頃よく遊んだ。そして、昭和 20 年 8 月 15 日正午、大日本帝国天皇よりラジオを通じてポツダム宣言（連合国

に無条件降伏)を受託した旨の宣言が発せられた。(我が家にラジオが無かった。私自身は全く覚えていない)敗戦により父は再度軍に復帰する必要がなくなったのですごく安堵したそうである。そして、その年の秋のこと、米穀の検査に来た農林省の検査官がお茶をしながらアアアアー日本は負けちゃったねーと元気なく家族と話しているのを聞いていたが、その情景はとても暗い思い出として残っている。

大本営発表によると、日本は戦争に負けるはずがなかったのであるが、知識人は早くの段階で大本営の発表は信じていなかったらしい。父も、近所のお偉いさん方から絶対秘密とって日本の敗戦が近いということを目にしていたという。

父自身も、横須賀軍港に軍艦らしきものが一隻も見当たらず、一兵卒に小銃さえも行き渡らずその現実を見て日本は長くはもたないだろうと実感したという。

父は、横須賀海兵団での兵営生活の苦労話もよく話してくれたが、軍隊生活で上官の横暴云々が云われるが、威張っていたのはきまって軍曹(特に炊事軍曹)などの成り上がり者だったと云っていた。支給された軍服、衣服、靴などほとんど体に合うものは無くて、大きいとか小さいとかいうと体を衣服に合わせろと無茶なことをいわれたそうだ。貸与された軍服、着衣、軍靴は定期的に員数の点検があり不足していると相当なペナルティーがあったようだ。そこで、ペナルティーを恐れた兵隊は、員数併せのための盗難は日常茶飯事だったと云っていた。風呂は大きなプールのように、何列か同時に入り歩きながら体を洗い向こう岸に到着で風呂を上がったという。

祖母は辛いことがあると軍隊に行った気になれと口癖のように云ったというが、軍隊生活をしてみてその意味が良くわかったと言っていた。前述したが、父にとって何より幸いだったのは、入隊先の横須賀海兵団のお偉いさんが親戚だったのは何よりの奇跡で、このようなことはまたとない幸運だったと云っていた。

以上の記述は幼かったころのかすかな記憶、断片的な記憶を掘り起こし、併せて祖父や、父母から聞いた話をまとめたものである。(不確かなところはあってもよいが。)私が自我に目覚めた頃の昭和20年は戦争の末期で、毎日が空襲状態で恐怖の連続だった。そうであるから、理由もわからず幼い頃に受けた恐怖は並大抵のものではなかったのである。

最近、精神医学の研究により、幼いときに受けた大きなストレスがトラウマとなって、成長してから精神面の障害が起きると考えられるようになった。そこで、私が幼い頃、暗いところで一人で寝るのがすごく怖くて、戦後しばらくの間毎日のように恐ろしい夢を見た。私自身が自我に目覚めた頃、想像もつかないとても恐ろしい体験をしたわけであるから、精神的に多かれ少なかれ傷めつけられたのではないかと思っている。(2021年8月15日終戦の日)